大友氏の歴代墳墓を巡る（一）

古藤田　太
（会員・弥生町江良）

はじめに

私は平素、佐伯史談に大友氏に関する記事が少ない点を痛惜していたが、最近は『大分の歴史』や、『大友物語』が出版され、又大分合同新聞に「大友宗麟の虚と実」が掲載される等全体としては中世の発掘は低調とは言えない。

私自身、斜陽の老境を迎えてか、大友氏の錚錚（そうそう）たる人物の終極をみて、死とは人生の上で如何に大切なものか、痛感するものがあり、大友氏歴代墳墓について其の所在を紹介し、その人の生涯の特筆すべきことを概説してみたい。非才の業で勿論充分なことは出来ないが、多少とも大友氏史に関心と理解を寄せて頂くことができれば幸である。

紹介する墳墓は全部とは言い難い。現在不明なものも、不正確なものもあるようだ。気軽に、順序も無く、思いつくままに紹介していき度い。

一　第十五代大友親繁の墓

墓　地　臼杵市戸室

墓碑銘　心源寺殿心源清公庵主

明應癸丑十一月十四日

（註）癸丑年は明応二年

豊後筑後二州太守従四位下大友豊後守源親繁公在世八十三歳

九月六日、平素念願していた大友親繁、政親父子の眠る墳墓を訪ねることにした。

台風十八号の去った後は急に秋の気配が濃く肌寒さを覚えた。五十川千代見氏と共に深田川を渡って戸室の里

を訪ねる。この辺りは一見して古い町並の残るような、そんな気のする風景が展開する。つたの這う見事な邸宅を廻って狭い道を登って行くと、路地が迷路のように続く。迷いながら行くと専売所の寮の前に出た。畑仕事中の御夫婦に尋ねると、何にかささやき合っていたが、「大友様の墓のことだろう」と教えて呉れた。又来た道を大半戻ると、僅かに入りこんだ路地で多勢の人達が土建作業をやっている。聞いてみるとここが大友政親公を祀る霊廟で、目下補修工事中であった。

廟の中に入ると、二米余の堂々たる政親公の墓がある。親繁公の墓はこれより指呼の間にあった。あたりは広々

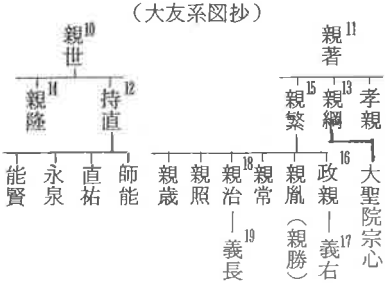
大友親繁公の墓

とした台地で、現代風の家が建ち並びつつあるが、ここが古くから戸室の岡と呼ばれる処であろう。寺跡らしいものは何一つ無いが、ここが友石山心源寺の跡であろうか。政親公ほど墓石は大きくはないが、心ひかれる風格のある墓である。「心源清公庵主」何とよい戒名であろう。

親繁は三十代の壮年期を永享、嘉吉の乱を経て漸く、がっちりと安定期に向かう時代に過ごした武将で、大友史上特異な存在であった第十二代持直党として、父親著（ちかあき）と共に行動した。

（大友系図）（数字は家督の順位）

（大友系図抄）



大友持直は、朝鮮貿易の開始者でもあり、傑出した人物であったと思われる。持直の後継者は親繁であろうと早くから属目されていたが、歴史の流れは予測もつかぬ方向にまゝ変ずることがある。

系図で解るように、親繁は十一代親著の四

男であったが、長兄孝親は、持直を殺して家督を狙い、応永三十二年（一四二五）三角畠（みすみばた）の乱を起して戦死した。兄親綱は持直の知らぬ間に家督になった変り種である。

このことを多少脱線するが説明すると、室町幕府は中国地方の雄、大内盛見に筑前国内にある幕府御料所を預けて、九州探題渋河氏（渋川氏）の後見役を仰せつけた。盛見は喝望していた博多のある筑前に、早速勢力の扶植にかかり、筑前内の大友氏の所領を没収しようとして、勿ち大友（少弐氏も同様）氏と衝突し、大内盛見を永享三年（一四三一）六月、大友氏等の連合軍は、筑前糸島郡萩原において自刃せしめた。幕府は驚き、大友氏一族中、持直と不和の親綱に十三代家督を仰せつけ、又持直の弟親隆を幕府側につかせた。かくて持直党は、大内持世を大将とする幕府大軍の討伐を受くることゝなった。

永享五年（一四三三）より持直党は筑豊の野に、或は姫嶽に未曽有の大戦に善戦し、敵の副将伊豫の守護河野通久を討取る程の奮戦をしたが、永享八年（一四三六）田北親増等の裏切りで終焉を迎えた。大軍を相手にこの長期戦に耐えたのは、十一代親著、親繁の援護によるものであった。

室町幕府の強硬なる持直党征伐は異状なまでの力の入れようであるが、応永から永享年間にかけて、幕府は最も充実した時代で、幕府の威令がよく行われた。大方の守護は、京都に集住を命ぜられていたが、大友氏、島津氏は特に在国を許されていた。当時九州探題という幕府の出先機関があっても、弱体化していたので、大半の守護は将軍に直結する有様であった。

たとえ在国を認められても、一度は上洛して京都に屋形を置き、ここに渉外官や雑掌をおいて幕府との連絡に当らせた。持直が幕府の討伐を受くることゝなった際、幕府に申し開きをしたのは大友氏が差遣していた貞岩和尚で、後年活躍の勝光寺光讃等もこのような渉外官であった。この姫嶽戦も幕府の巧妙なる家臣統卒の手段として見る学者もいるようである。

長期に亘る抗戦の驚くべき経済力は、朝鮮貿易から生まれたものであったが、永享九年（一四三七）、朝鮮貿易の権利は、持直から親繁に譲られた。今日、李氏朝鮮の『太祖・定宗・太宗実録』『世宗実録』『海東諸国記』『印冠の跡付』等によって、朝鮮貿易の証明記録がある中に、大友殿として持直、親重、親繁、親繁の子の親常の名が見える。親繁は、かつて敵側に廻った親隆の女を妻にすることによって、文安三年（一四四四）幕府から

正式に守護職を安堵され、第十五代大友氏の家督となった。

親繁は、文明元年（一四六九）五月、ここ戸室の岡に隠宅を建てて移り住んだ。はるかに姫嶽の優美な姿が望まれる。懐旧の情にふける日が多かったことだろう。冬暖く、夏爽涼といった佳境である。寛正三年（一四六二）頃から長男政親に家督の仕事の一部を譲ったが、国政の一部と軍事は自ら管掌したようで、総ての仕事を譲ったのは文明五年（一四七三）といわれているので、尚十年程院政を執ったことになる。大友の名だたる家臣が、この坂を喘ぎながら登ったことだろう。本庄伊賀守、上野

大友政親公の墓

蔵人佐、岐部山城守、吉弘綱重といった重臣はどのようないでたちであったろうか。

親繁は明応二年（一四九三）十一月十四日、当時としては珍らしい程の高齢八十三才を以て死んだ。今日残されている彼の花押は、歴代大友氏の中で最も雄勁（けい）なものである。

二　第十六代大友政親の墓

墓　地　臼杵市戸室

墓碑銘　明應五丙辰歳

（正面）海蔵寺殿珠山如意大禅定門

六月十日

九州二島探題

（背面）大友第十五代豊前守従四位下行兼

四州大守源政親行年五十三

於于長州地蔵院戦死

㈱　墓碑は十五代となっているが普通十六代とす。

私は同じ戸室の岡にある政親公の墓のあるところに戻ってきた。政繁公の場合と違って、三坪程の廟の中に、二米余の堂々たる凝灰岩の墓が建てられている。村の人

に敢て聞くこともしなかったが、何故政親公のみ格別に崇敬されるのであろうか。どうも日本人は数奇な運命の人に同情し易く、それが信仰に変ってゆく場合が多いように思う。先程教えて貰った「大友様」はこの政親公に違いない。この政親公を語らんとすれば、どうしても嫡男義右との争乱を語らないわけにいかない。

政親は寛正三年（一四六二）十月、十九才で大友氏十六代の家督となったが、実権が移るのは文明五年（一四七三）頃であった。この家督相続も、大友氏の両統交立という時代としては問題となるように思うが、この話を耳にしたことがないのも、父親繁が親隆（大友系図参照）の女を貰ったことから、両統交立の観念が立消えのかたちとなったものであろう。

大友氏が単独相続制を採用したのは、渡辺博士の『大友氏の相続制の研究』によると六代貞宗の延慶二年（一三〇九）あたりからで、惣領家、庶子家のすべてにわたって、嫡庶の対立を激化し、南北朝期には、南軍、北軍に分れて骨肉相食む状況をつくり出した。大友氏は内にこうした家族制度上の社会問題をかかえ、又一方外戦を戦い抜かねばならなかった。八代氏時の子の氏継、親世の時分から嫡庶の分裂を防ぐ手段として、兄弟で一定期間家督を継ぎ、その子孫が交互に立つ、両統交立の時代を迎えたものである。

政親には義右の外に二女があり、その一人は島津氏第十二代忠昌に嫁し、十三代忠治、十四代忠隆、十五代勝久を生んでいる。義右は応仁三年頃の生れで、初名を親豊と呼んだが、長ずるに及んで父子の意見が分かれ、文明十六年（一四八四）政親が義右に家督を譲った頃から父子の不和が生じたとする説もある。

幕府でも将軍職の争奪が演じられていた。足利義材（もと）に対して義澄、細川政元の争いに、父政親の意思を無視して義右は、義材に味方し、忠誠を誓う明応二年（一四九三）頃から不和を生じたとする説や、政親が上洛の留守の間に、日田親勝（親胤）（大友系図参照）が、義右の家督を不服として兵を挙げ、親治に平定される日田の乱を、政親が指導したとする説等、不和の原因は幾つか数えられているが、果してどのようなことが不和の起りであったろうか。

ともあれ大友氏の不和は深刻なものとなっていった。政親から当時筑後代官として筑後に常駐していた田原親宗に宛てた文書の中に「父子不和の争乱は大聖院宗心（大友系図参照）のなす業であること、日田の件を恨みに思

うことが原因である」と述べてある。父子が分れ、家臣も全く二分して争乱の状態となっていったが、この争乱の影の人物として活躍した宗心や日田氏が、この争乱に関与していたことは相違ないことであろう。一時、父政親が東庄内か白丹辺に隠遁したことは、田尻文書がこのことを物語っている。或は子の義右が三重から佐伯に逃避し、これを政親軍が攻撃する有様であった。佐伯氏は義右に加担していたようである。

政親は数多くの書信を残しているが、義右党に随分苦るしめられながらも「我子可愛いさ」の心情が滲みでているものが多く、惻々として胸を打つものがある。明応二年頃からは、義右の勢力が強大となって、幕府や将軍の下し文は総て義右の手を経て九州の諸将に取り継がれた程である。この父子の争乱については、互いに軍兵を以て戦うとなれば、時代が醸し出す根の深い要因もあったかと思うが、大聖院宗心と共に重臣市河親清を挙げる人がある。親清は東庄内の士で、親繁時代の加判衆を務め、延徳年間（一四八九ー九一）あたりは社家奉行である。大友家文書録によると、明応五年、政親が地蔵院で自殺する際、市河氏も戦死とあるは恐らく市河親清のことであろうから、田北学先生同様、親清は政親党であったのではないかと思われてならない。政親党の有力の士、田原親宗がこの事件に関係して箕崎（みのざき）で戦死した。

明応五年（一四九六）五月二十七日、義右は死去した。この義右の死は父政親の手によって毒害されたというのが通説である。信頼度の高い（渡辺博士）とされる『御法興院日記』に、「明応五年七月六日辛亥、晴及晩小雨、心中念誦例の如し。筑紫の大友の長男は此の間越中の大樹と同意也。當年九州より責め上る可きかの由風聞の處、近日彼の父と不快なり、毒害により死去云々。彼の男大内の聟たる間、此の事露顕す。父を大内方より生害せしむ云々希代の事也」

父政親は臼杵にいたが、明応五年五月十三日、筑前立花に向けてひそかに出帆、赤間関で捕えられ、家臣十三人と共に永福寺に閉じこめられた。大内義興側の尋問に出家することを希望、家臣も之に従って剃髪したが、宗心の策動か、六月十日になって雲行きが変って、長門地蔵院で主従悉く切腹させられた。或は戦って敗北したともいう。政親の妻は大内政弘の妹であった。私共はここに四百八十年前、大友の家督父子が相争う地獄図絵と戦国の悲惨を見たわけである。

この争乱は中国の雄大内氏を考えても、又宗心を考え

ても、大友氏最大の危機であった。この最大の危機は、政親の異母弟親治の登場によって、「御所の乱」で宗心を除く大半の奸賊が平定されて救われたのである。『豊後国志』によると、明応三年（一四九四）に政親は羽衣山上に禅寺を建て、延東震禅師を開祖とした。その寺名を海蔵と名づけた。政親は自分が死んだら父親繁の近くに葬むるようにとの遺命をしていたので、群臣は相議してここに葬ったものである。

表紙について

切支丹柄鏡（きりしたんえかがみ）

（県指定重要文化財）

宇目町大字南田原字中岳
佐保盛重氏所有

この柄鏡は佐保家に代々伝わってきたもので、材質は青銅、形体は円体持送り無しの柄鏡である。

柄は長さ八・五センチ、持送りがなく素柄（すえ）である。

鏡体は直径一一センチの円体で、その縁（ふち）は直角式低縁、鏡背の地は細粒砂目である。

紋様が特異で、中心部の〇に十字は、日輪十字章であろう。十字章をはさむ上下の異様な紋様は、上が「エ」下が「イ」「ス」、つまりイエスと読めないこともない。縁に沿って描かれている植物はオリーブに最も似ているようである。オリーブもまたキリスト教とは深い関係を有しているものである。

「天下一上村大和守」という作者銘がある。

形式や鏡背地、作者銘の様式等から推定すると、江戸中期以降の作と思われる。

幕府は慶長十九年（一六一四）以来キリスト教の禁圧政策を強めていったが、寛文四年（一六六四）からは、各藩に宗門改めを強制的に実施させるようにした。更に同十年（一六七〇）宗門改めに際して人別帳の作成を指示した。各人はキリシタンでないという証明のために、どこかの寺に所属しなければならなくなった。

岡藩もその例外ではなかったが、キリシタン禁止にもかかわらず、隠れて信仰する者（隠れキリシタン）は後をたたなかった。

この柄鏡が江戸中期以後に作られたものであることからしても、この辺境の宇目郷にもキリスト教を信仰する者がおり、それを布教した者がいたに違いない。

（『ふるさとの文化財うめまち』より）